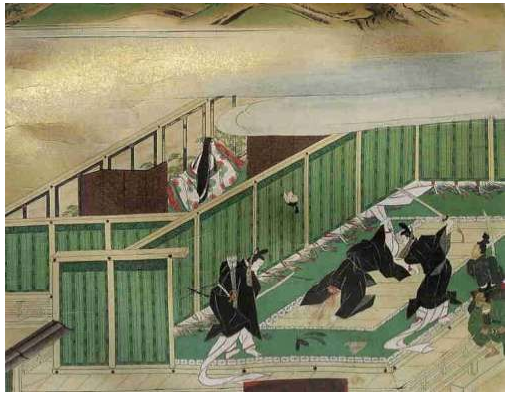
茜色の歌姫

第一部　乙巳の変

戊申に、天皇大極殿にに御ます。古人大兄侍り。中臣鎌子連、蘇我入鹿臣の、人と為り疑い多くして、昼夜剣持けることを知りて、俳優に教へて、方便り解かしむ。入鹿臣、咲ひて剣を解く。入りて座に侍り。（中略）中大兄、子麻呂等の、入鹿が威に畏れて、便旋ひて進まざるを見て曰わく、「咄嗟」とのたまふ。即ち、子麻呂等と共に、出其不意、剣を以て入鹿が頭肩を傷り割ふ。入鹿、御座に転び就き



多武峰縁起絵巻

て、叩頭みて曰さく、「当に嗣位に居ますべきは、天子なり。臣、罪を知らず。乞ふ、垂審察へ」とまうす。天皇大きに驚きて、中大兄に詔して曰はく、「知らず、作る所、何事有えりつるや」。中大兄、地に伏して奏して曰さく、「鞍作、天宗を尽し滅ぼして、日位を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代えむや」とまうす。天皇、即ち起（た）ちて殿の中に入りたまふ。佐伯連子麻呂、稚犬養連網田、入鹿臣を斬りつ。是の日に、雨下りて潦水庭に溢めり。席障子を以て、鞍作が屍に覆ふ。（『日本書紀』巻第二十四）

第三章　吉野の秋

６６４

伊勢を発ち、紅葉の色づいた伊賀の山を越え、飛鳥より二十里（約11キロ）の山中に、吉野宮が築かれていた。

切り立った崖の真上に、半里（約270メートル）四方の地が平らに開かれ、土塀に囲まれたなかに、茅葺きの家（や）と蔵が二つ、並んでいる。遠くに滝の音が聞こえた。

門をくぐると、色白の小柄な男が、伴部を随（したが）え、伊勢より険しい山道を数日をかけて現れた大海人皇子に向かって拝礼した。

三十路近くであろうか、生気のない肌に、眠たげな細い眼、中臣鎌子、と低い声音で名乗った。

広間に通された皇子に、中臣鎌子は告げた。

「年が明けるまで、ここにて過ごされたまえ」

あと三月も……？　海部石床ら大海人皇子の舎人どもが互いに貌を見合わせるなか、中臣鎌子は静かに付け加えた。

「長年、伊勢にいました皇子が飛鳥に入りたまう。その式は、綺羅びやかに飾らねばならない」

年が開けて雪が解ける頃には、造営中の新たな大王宮も完成する。春立つめでたき日に、大王に拝謁し奉りたもうべし……。鎌子は、静かな、しかしどこか威を含んだ声音で言った。

「年明けまでは、吾が従弟の金が、皇子とともにここに留まる」
進み出た中臣金は、鎌子よりやや歳下か。痩せた鎌子と対称的に、大柄で肉厚な男であった。
「中臣鎌子よ」
大海人皇子が口を開いた。
「伊勢より、亜那という名の乙女が、鏡郎女に伴われ、飛鳥に入った」
鎌子は、眼を伏せ、心持ちを毫も見せず、俯いて聞き入っていた。
「今はいずくにいるか、汝は知るや？」
鎌子はしばし黙し、やがてゆっくりと首を振った。なんでも金に命じられよ……。そう言い残して鎌子は、飛鳥へと去った。
「ならば、雪解けとともに伊勢を出ればよかったのではないか」
不満を漏らす石床や村国男依を制したのは、いちばん年かさの舎人である置始比等であった。
「ただ、皇子の都入りを飾るためではあるまい」
吾がそれとなく、中臣の伴部どもに聞いてみる故に、汝等は無用に騒ぐな、と比等は言った。

一月が過ぎた。
三日に一度、宴が開かれ、飛鳥より楽人や俳優が招かれた。中臣金は陽気な男で、自ら舞い、宴の場を盛り上げたが、昼間は、野を歩き、川で魚を得ることのほか、何もなすことがなかった。しかも、宮の外に出るときは常に中臣金、あるいは金の伴部が随伴し、気の休まる暇もない。
一夜、置始比等が、皇子の寝屋に密かに入ってきた。

「皇子よ」
比等は、声を潜めていった。
「飛鳥では今、軍が起こっている」
「軍？」
褥より起きあがった皇子は、眉を顰めた。
「然り。皇子が伊勢を発った頃、大王は、蘇我大臣と謀り、兵を以て斑鳩にいます山背皇子を攻めたもうた」
比等は言った。古き昔、大和を開いた飯豊女王は、蘇我満智とともに善政を行い、多くの国々が大和に随った。飯豊の孫である炊屋女王の代、女王は甥で摂政の厨戸皇子や大臣の蘇我馬子とともに、仏教の興隆に力を尽くし、多くの寺を建て、さらに隋や新羅、百済とも交わりを深め、大和はますます栄えた。
だが、十数年前、炊屋女王の死後、その後継をめぐって争いが起こった。厨戸皇子の子、山背皇子が最有力であったが、如何なる経緯故か、大海人皇子の父、田村皇子が大王となり、その死後、皇后の宝皇女が大王となった。
山背皇子は不満を抱き、飛鳥を出て斑鳩の寺に籠もり、王宮に出仕もせず、密かに兵を集めた。一月前、すなわち大海人が伊勢を発った時、宝大王は、蘇我の大臣と謀り、斑鳩に兵を差し向けた。山背皇子の一族は追いつめられ、斑鳩寺に籠もり、悉く自ら首を縊った。今は、方々に兵が送られ、山背皇子に味方した者どもを探し出している……。
「蘇我の大臣、すなわち亡き馬子が孫、その名は鞍作、本来ならば味方し奉るべきを、何故に

吉野宮復元模型

自ら兵を派して山背皇子を誅し奉ったか、群臣は皆、得心(とくしん)していないとか」

「そうであったか……」

大海人皇子は、深く息を吐き出した。

大王家の皇子が、一族もろとも追いつめられ、命を奪われた。斑鳩寺は、かの聖徳を称えられる厨戸皇子が建てた。

寺のなかは、皇子の妃や子女の屍で埋められ、凄惨な様を呈していたという。

比等は続けた。

「乱れた飛鳥に、皇子が入りたまえば、さらなる乱れの元になるやもしれず、それ故に吉野に留め奉ることにした、とのこと」

大海人皇子は、物憂げな面持ちで問うた。

「年が明ける頃には、飛鳥の乱れは治まるのだな？」

「それが……」

置始比等は、さらに声を潜めた。

「蘇我鞍作は、策を好み、心映え太き男。新たな

乱が起こるやもしれず、との噂」

久しぶりに、日差しが暖かく降り注ぐ昼、大海人皇子は、吉野宮の庭に設けられた高楼に登った。半日も歩けば飛鳥の都。だが、山深い地に樹木が生い茂り、飛鳥を望むことはできない。

飛鳥の都……亜那が住まう地まで、あと半日。

しかし、すぐにその地に行くことは出来ない。

中臣金は、常に笑みを浮かべているが、その眼は決して笑っていない。時折、金の伴部が吉野宮を出て、飛鳥の方へ去って行く。皇子の動向を、飛鳥に報らせているのだろう。

伊勢を発ったとき、皇子は、ただ亜那に会うことのみが、頭にあった。大王の位をめぐって飛鳥に渦巻く策謀のなかに入って行くのは、気が萎えた。

ふと、門のあたりの騒がしさに下を見おろせば、舎人や伴部どもが庭を駆け回り、その中心に中臣金が大声で何かを叫んで差配している。

「皇子よ」

階梯(きざはし)を登ってきた置始比等が叫んだ。

「飛鳥より、蘇我の大臣(おおおみ)が」

「蘇我の大臣？」

「然り。蘇我鞍作(くらつくり)」

門が開かれた。黒々とした馬に跨り、大臣の位を示す紫の冠に、鮮やかな黄色の袍(ほう)を纏(まと)った者、伴は僅かに二人、堂々と胸を張って乗り入れてきた。中臣金以下、地に片膝を突き、頭(こうべ)を垂れ

て出迎えた。
飛鳥で権を振るう蘇我大臣が、前触れもなく何故に吉野に。
馬上の蘇我鞍作が高楼を見上げた。
「大海人皇子よ！」
鞍作は張りのある声音で叫び、馬から降り、地に膝を突き、両手を前で組み合わせて拝礼し、すぐに立ち上がり、大股に高楼に向かって歩み始めた。中臣金が駆け寄り、何か耳打ちしたが、鞍作は一瞥もせず、煩わしげに袖を振って追い払い、階梯に手を掛けた。
「蘇我大臣鞍作」
高楼に登ってきた鞍作は、再び拝礼し、名乗った。
年の頃は三十路半ばか、丈高く、肩幅広く、太い眉に、大きな口、巌のような顎。声音と同様、猛々しい男と見えた。
「伊勢より、すでに吉野宮にあらせられると承り、年明けまで待つことかなわず、馬を走らせて参った」
皇子は床に坐してうなずいた。
「吉野の冬は凍える。薪や酒、獣皮の袍など持参し奉った」
庭では、蘇我の伴部どもが、背にした重そうな荷を降ろし、蔵へと運び込まれていた。
「蘇我大臣」
大海人皇子は問うた。

「前触れもなく、何故にここへ？」
「明日、ともに山にて狩りをされたまえ。飛鳥の都に入りたまう前に、さまざまに物語りし奉りたきことあり」
蘇我鞍作は、太った躯を揺らし息を切らせて高楼の階梯を登ってくる中臣金を一瞥し、笑みを浮かべた。
「あの者のおらぬところにて、ぜひ物語を」

静かに……。
舎人の朴本大国に手で制され、大海人皇子、蘇我鞍作、そして中臣金は、腰を半ば浮かせたまま、息を詰め、大国が小弓を構え、引き絞るのを見つめた。
笹の生い茂る向こうに、一頭の大鹿が、こちらに背を向け、首をぴんと伸ばして立っていた。
ひゅんと矢が飛び、誤たず頸を射抜き、大鹿は静かに膝を折り、横倒しに倒れた。
「仕得たるかな」
蘇我鞍作が立ち上がり、手を打った。
「広々とした野にての狩りも面白いが、山の奥にて静かに獲物を追う狩りも、また別の興趣がある」
皇子と狩りをする、と言い出した蘇我鞍作に、中臣金は、吉野宮の周辺には、狩りの出来る広々とした野はない、と諫めたが、鞍作は聞き入れなかった。
山に入り、樹々の狭間を縫って歩き、足跡や糞を目印に獲物の後を追う。大人数で行けば、獲

物に気配を察知されやすい。かつては伊勢の山中の狩人を束ねていた舎人の朴本大国が、先導を申し出た。では、皇子と大国と吾の三人で、と頷いた鞍作に、中臣金は、吾も随行すると言い張った。結局、日が昇るとともに四人で吉野宮を発ち、山に入った。

笹を踏み分け、大鹿の屍を囲んだ。

「次はいずくへ」

と問う鞍作に、朴本大国は、あの尾根あたりに、と指さした。では、行こう、と鞍作は大股に歩き出し、残る三人は、互いに貌を見合った。

誰が鹿を運ぶのか。

中臣金は、じっと大国を見つめた。いちばん位の低い舎人が担ぐべきであろう。大国が鹿を持ち上げようと腹部あたりに手をかけた時、鞍作の声が飛んできた。

「その舎人は、狩りの先導役。汝は、優れた猟人に、重い獲物を運ばせるのか」

鞍作は、鋭い眼差しを、中臣金に浴びせていた。

「金よ、汝が運べ」

日が沖天に昇る頃までに、二頭の鹿と、二匹の兎を得た。そのうち、鹿一頭は鞍作が仕留めた。皇子は、一頭を狙い、取り逃がした。肥満した中臣金は、太い木の枝に縛り吊された獲物を運ばされ、谷川のほとりに辿り着くや、背負った獲物を投げ出し、仰向けに倒れ、息も荒く喘いだ。

「ちょうど昼餉時、しばし休もう」

鞍作は、息も絶え絶えに横たわる中臣金を冷ややかに見やり、朴本大国に問うた。

「干し飯のみでは興がない。汝、ここで火を熾し、その鹿を裁いて昼餉に調えられるか？」

頷く大国に、鞍作は満足げに微笑み、巾を川の水に浸し、汗を拭う皇子に向かって言った。

「さらば皇子よ、鹿が炙り了えるまで、しばし吾とともに、谷を歩きたまえ」

谷川の畔を、石づたいに歩き、大国や金の姿が見えなくなったところで、蘇我鞍作は腰を下ろした。

「皇子よ、吉野での暮らしに、不便はあらせられぬや」

「暖も食も足りている」

皇子は、水面を泳ぐ小魚の群を見つめながら応えた。

「女は如何？」

皇子は鞍作の貌を見た。鞍作は続けた。

「見れば、吉野の宮に仕える女孺どものなかにも見目麗しき者あり。寝屋に呼びたまわれて、一夜の慰みとなすもよかるべし。あるいは皇子は、未だ女とまぐわいたもうたことは……」

笑貌で問うように見つめる鞍作の眼差しを、皇子は貌を背けて避けた。伊勢の浜の苫屋で、小盾が姦した漁人の妻の口に、陽物を含ませ精をもらした事が、脳裏に蘇った。

「大王家の皇子として、否、吾のように大臣の家に生まれた者にとって、女とまぐわうことは、愉しみのためだけではない。己が権勢のためにも、是非、多くの妻を得たまえ」

「権勢？」

不思議そうな貌で問う大海人皇子に、鞍作は、そっと声をひそめた。
「たとえば、皇子の父なる亡き田村大王」
皇子の貌が強張った。

食い入るように聞き入る皇子の貌が、次第に蒼ざめてゆくのも意にせぬふうに、蘇我鞍作は語った。
……皇子の父なる田村皇子が飛鳥の都に現れられたのは、ちょうど皇子がお生まれになられた頃か。吾はまだ十七か八、詳しい事までは覚えてはいない。聞いた話では、田村皇子は飛鳥近くの生まれではなく、越であったか吉備であったか、大和の外にて育まれ奉られた。炊屋大王の従兄なる他田皇子の孫という事であったが、何故に王族が吉備や越の地にいましたのか、誰も知らなかった。
田村皇子は、炊屋大王の寵を受けられたまい、したしく王宮に出入りされ、やがて政事にも関わるようになった。
「何故か、お分かりになられるや？」
歪んだ笑みを浮かべて問う鞍作に、皇子は頸を横に振った。
「幾度か、炊屋大王の寝屋に入る田村皇子を、見奉った者がいる」
「寝屋……」
「然り、然り」
呆然となった皇子にかまわず、呵々大笑した鞍作は言った。

「そのころ、田村皇子は、今の吾と同じくらいであられたか。美まし面だちの男盛りの皇子が、七十歳を過ぎた老いたる女王の寝屋に忍び、お慰め申し奉る。やがて炊屋大王崩御したまいて後、誰もが後継は山背皇子と思いしを、亡き女王の遺詔として、みごと田村皇子が大王の御位に即かれた」
皇子の肌に寒いものが走った。七十の老女とまぐわう父の姿が、朧に形をとって浮かんだ。
鞍作は続けた。
「今の大王はすなわち、田村大王が吉備か越にいました折りに妻となしたもうた女。すなわち、田村大王は、大王の御位を、みごと寝屋にて手に入れたまい、元はいずくの豪族の娘ともしれぬ大王が妻も、宝皇女として大王家に列せられ、今は宝大王」
蔑んでいるふうはなかった。むしろ、心より称えている口振りであった。
「皇子よ……。まぐわいは愉しみのためだけではない、と先に申し上げた。すなわち、まぐわいこそが政事。山背皇子は、そこを分かりたまわなかったが故に、滅んだ。すなわち、聖徳の皇子と称えられた厨戸皇子の御子という血筋のみを頼りにされたが故に」
されど……、と鞍作は続けた。
「その田村大王も、何故にか御子は宝大王との間になされた葛城皇子ただ独りであった。未だ十八にあらせられるが故に、すぐに大王位を継がず、宝大王がその御位に昇りたもうた。御子が大勢あれば、力ある豪族の娘と妻合わせ、御稜威を盤石にもし得る。ただ、大王位の後継を定めるとなると、数が多ければ争いほど、争いの元となる」
お分かりか……、と問わんばかりの面持ちで、鞍作は皇子を見た。

如何に応えるべきか。大海人皇子は迷った。吾が田村大王の二人目の御子として飛鳥に行けば、それだけで争いの種となると言わんばかりではないか……。あるいは、争いが始まった時のために、蘇我との結びつきを強めておけ、との誘いなのか。

皇子よ！

遠くで大国の声がした。

昼餉が調うた。

「飛鳥に入りたもうた後は、是非とも、甘檮丘なる吾が邸に来られよ」

鞍作は言った。

「吾が邸にも、数多の美まし乙女がいる故に」

まぐわいこそが政事……。

蘇我鞍作の言を信ずれば、皇子の父なる田村大王は、誰もが得心の上で大王の御位に即いたわけではない。他国より現れ、老いたる女王の寵を寝屋にて得、いわば大王の御位を奪った。父の死後、大王を継いだのは、やはりいずくの生まれとも知れぬ皇后。本来ならば大王となってしかるべき山背皇子は、大王家に叛いて討たれたのではない。飛鳥の大王家を乗っ取られた者どもに、滅ぼされた。

すなわち、大海人皇子は、飯豊大王の子孫から大王家を簒奪した男の血を引いているに他ならない。

何故、蘇我大臣は、そのことを吾に告げたのか？

鞍作が吉野宮を発ち、飛鳥へと去った後も、皇子はそのことを考え続けた。

「吾ら蘇我は……」

と鞍作は言った。

大和を開いた飯豊大王を輔けた満智の代より、諸々の王族や力ある豪族の娘とまぐわい、子を産ませ、その子が女ならば大王家に后として差し出し、権勢を築いた、と。

兵を用いて力を得るは下の下。まことの権勢は、寝屋より出ずる。

伊勢の小盾の言が蘇った。彼は漁人の妻とまぐわい、彼女の夫はそのことを知っていた。……かの女が孕めば、夫は海部の一族に連なる。吾らが家の財のおこぼれにあずかる。

小盾の傲岸な貌と、蘇我鞍作の威風に満ちた貌が重なった。皇子の父なる大王も、彼等と同じ貌をしていたのだろうか……。

亜那……。

皇子は身をすくませ、寝屋で独り坐し、ちいさくその名を、救いを求めるようにつぶやいた。